

博士論文（要約）

ハノイ旧市街の「職業の通り（phố nghề）」の
変容メカニズムに関する研究

（要約）

柏原 沙織

本論文は、ベトナム・ハノイ旧市街の同業者が集積する「職業の通り」を、都市アイデンティティの源泉となる「動的な無形要素」と位置づけ、その長期的・短期的な変容のメカニズムを明らかにすることで、変化を内包する歴史地区の商業空間において、動的な要素をいかに維持・継承しうるのか、マネジメントに向けた示唆を見出そうとするものである。

全6章から成り、各章の要約は以下のとおりである。

序章

序章では、ハノイ旧市街の職業の通りが既存の文化遺産のカテゴリから外れつつも、動的な無形文化遺産価値が見出せる歴史的な商業空間であることを踏まえたうえで、リビングヘリテージや大都市の歴史的商業地区、歴史的都市景観(HUL)の事例のレビューから、現在の都市遺産マネジメントにおける論点として、3点を抽出した。①伝統的なものから適応的な変化を遂げたものをどう評価するのか、②地区を特徴づける活動と伝統的コミュニティの分離をどうとらえるのか、③地区を特徴づける商業活動の変化をいかにマネジメントするのか。以上の論点の中で、ハノイ旧市街の「職業の通り」を研究対象として動的な無形要素のマネジメントに向けた示唆を得ることの意義を提示した。研究目的として、①ハノイ旧市街の地区全体レベルでの職業の通りの変容プロセスの解明、②通りレベルでの職業の通りの変容メカニズムの解明、③旧市街全体との関係から職業の通りの都市遺産価値の再定義、④ハノイ旧市街の今後のマネジメントへ向けた示唆の提供、の4点を挙げた。

ハノイ旧市街の町並み保全に関する既往研究のレビューより、保全の枠組みに関する研究では1989年から2017年現在に至るまでの発展状況の評価が欠けていること、また無形要素に着目して枠組みをレビューしたものはみられないことを指摘した。有形要素についてはかなりの研究蓄積があるものの、無形要素の研究は一部に留まっており、特に職業の通りの変容に関する量的な研究は少ない。その中で、Okada(2013)の職業分類の有用性、その他の調査において現在の地区の大部分を占める現代的な同業者集積の地区特性としての視点が不十分な点を指摘した。また、短期的な集積の転換メカニズムは通り名の職業が維持されている通りのケーススタディは実施されているものの、それ以外の変化した通りに関するものは見られない。

以上より本研究の新規性として、1989年～2017年のハノイ旧市街の保全の枠組みの発展を無形要素に着目して分析する点、複数時点の同業者集積の分布から変容を分析・類型化を試みる点、現代化した集積も含めて地区との関係から職業の通りの都市遺産価値を検討する点、通り名の職業から変化した通りの短期的な集積の転換メカニズムを分析する点、の4点を挙げた。

第1章：ハノイ旧市街の職業の通りの成り立ち

第1章では、ハノイ旧市街の職業の通りの背景として、旧市街の都市形成史および商業地区としての発展の歴史と、コミュニティの変遷の歴史を含む社会的背景を把握するとと

もに、それらが職業の通りへ与えた影響を整理した。

ハノイ旧市街の道路は17世紀までに宮廷のあったシタデルと紅河をつなぐ東西軸の整備が進み、18～19世紀にかけて徐々に南北軸が形成された。19世紀までにほぼ完成した骨格の上に植民地期に進んだ道路の新設・街区の細分化で形成された都市構造は、現在まで維持されている。地区内は小さな道路で有機的に繋がれており、この道路ネットワークで分割される細かな街区割が特徴となっている。主要な幹線道路に加えて、紅河と蘇瀝江を中心とした河川システムは経済活動に大きく影響しており、埠頭や橋の近くに市が形成されていた。

ハノイ旧市街の職業の通りは、11世紀の建都直後からシタデルへの供給源として、周辺の職人集落からの移住者が集まるギルドの集合として始まった。職人ギルドの都市内集落が先にあり、その中に形成されたのが「職業の通り」である。植民地期以前の封建時代を通じて各商区に特化した商品が取引されていた。都市の拡張期を経て17～18世紀頃にシタデルへの経済依存から脱却し、首都の経済中心としての地位を確立した。植民地政府による路上での青空市場という商売形態への介入はあったものの、植民地期も引き続き活発な商業中心地としての性格は維持された。フランス植民地化により、新たな顧客層の獲得、道路の新設などにより、職業の通りの中の経済活動にも変化がもたらされた。1954年の計画経済導入に伴う生産・流通手段の国有化により、個人の製造・販売事業が規制されたことで、30年に渡り商業地区としては衰退した。ドイモイ政策導入を経て1988年の個人事業への規制緩和と自由経済化による輸入ルートの獲得により、活発な商業地区として再興し、現在に至っている。計画経済期に衰退した伝統手工芸などの生産活動はその多くが失われ、職業の通りは、その多くが製造販売から販売のみのものになった。商業組織としてのギルドも失われた今、個人店舗の集合が現在の職業の通りの姿である。

ハノイ旧市街全体では、集落由来のコミュニティに始まり、15世紀以降の中国人の流入、1954年以降の社会主義化による、富裕層の南部・海外への流出、空き家や既存住宅の細分化と帰還軍人や国家幹部への再分配、1978年の中越戦争による地区内の中国人の流出、ドイモイ後、1990年代以降のビジネス機会を求める新規住民の流入、といったターニングポイントを経て、コミュニティそのものが大きく入れ替わっている。1950年以前から住む世帯数は15%未満と少なく、1950～1959年、次いで1990年代以降に住み始めた世帯が多くなっている。職業の通りの成立に深くかかわった職人集落との繋がりは、現在では希薄になっており、一部の通りで集落にルーツを持つ世帯が居住・生業を営むにとどまる。また1954年以降の町家の集合住宅化により複雑化した所有権は、居住世帯間の合意形成を阻む形で建物の建て替えを抑制し、結果として特徴的な敷地割を残している。

以上より、ハノイ旧市街の職業の通りについて、時代の変化の中で主要な顧客層の変化も取り込みながら継続して発展し、商業の衰退期を経ても同業者集積という商売形態は再度復活しているという流れ、小規模事業者の集合であるという特徴を指摘した。また、地区全体としては、コミュニティの断絶を経ても商業中心としての地位を維持・再興してきた商業地区であること、また封建時代から続く道路ネットワークと細かな街区割という特性を述

べた。さらに、現在進行中の住民移転計画は町家の建て替えを阻んでいる所有権の問題を解決すると予測されるため、現状の規制では想定されていない点について町並み保全に向けた制度的準備を進める必要性を指摘した。

第2章：ハノイ旧市街保全の無形要素に関する仕組み・取組の発展

第2章では、ハノイ旧市街の職業の通りを取り巻く保全の枠組みについて、国・市レベルの地区保全・無形文化遺産保護の枠組みを概観したうえで、ハノイ旧市街の無形要素の保全の仕組みと取組の発展を整理し、到達点と課題を明らかにした。以上を踏まえて、ハノイ旧市街の職業の通りの今後のマネジメント向上に向けて明らかにすべき点を指摘した。

ベトナムの文化遺産保護行政における無形文化遺産への意識は、1990年代のユネスコの議論・取組にも影響を受けながら醸成され、1998年の方針で有形文化遺産と共に民族的アイデンティティを構成するものとして位置づけられた。2001年の文化遺産法に保護対象としてその振興・政策が明記され、国家目標プログラムでも収集・振興の予算が付けられる形で発展している。産業的な側面では伝統手工芸の維持継承のための支援策がある。地区保全は歴史遺跡・名勝カテゴリの中で、コアゾーン・バッファゾーンの2レベルでの保護区域が設定されている。

都市計画制度における地区保全は、マスタープランレベルでゾーニングにより保全地区が設定されると、下位レベルの計画で踏襲され、保全地区に対する独自の規制が掛けられる。他の建設規制にも保全地区の指定や保全地区規制の内容が反映され、事業者への建設許可発行の審査プロセスにおいて担保される。

これらに加えて、職業の通りの成り立ちと関連している職人集落の支援は、商工政策を中心に支援が行われているが、職業の通りとの関連は政策面では見いだされておらず、職業の通りへの支援策はない。

ハノイ旧市街の無形要素の保全に関する仕組み・取組の発展状況は、第1期：有形要素の保全に向けた基盤整備と無形要素への意識の萌芽期（1989～1998年）、第2期：有形要素保全の事業化の進展と無形要素の調査期（1999年～2010年）、第3期：有形・無形要素の統合の模索期（2011年～現在）、の3期に分けられた。

ハノイ旧市街の特徴である動的な無形要素への意識は第1期の国内外の専門機関による調査・提案の一部で提起されていたが、それが法規文書上に反映されるのは第2期の規制における「商業中心軸の保存」が最初である。第2期には無形文化遺産がクローズアップされ、都市間協力事業の中で仏・越両国の関係者による静的な無形要素（伝統工芸等）から、動的な無形要素（各通りの職業の実態・集積の状況やĐinh、路上活動の調査、職業の通りの変遷分析等）の調査研究が大きく進展した。同時に国家遺跡指定の際には、職業の通りの由来と都市空間の形成過程を絡める形で、文化的・建築的価値への認識が初めて示された。これらの内容は第3期においてマスタープランレベルでの初の無形文化遺産への言及、続く規制の中で具体化され、伝統的な職業の通りの生産活動への支援が明記されるという形

で発展した。

現在の仕組み・取組の到達点として6点を指摘した後、全体を俯瞰して、ハノイ旧市街の職業の通りのマネジメント向上に向けた課題として、次の4点を抽出した。①地区全体の価値に貢献する要素としての職業の通りの価値の再定義、②用途への介入に向けた変化の許容範囲の検討、③同業者集積の維持に向けたマネジメント対象の検討、④商業活動の振興手法の検討。

第3章：ハノイ旧市街の職業の通りの変遷

第3章では、ハノイ旧市街全体の職業の通りにおける集積職業の転換プロセスを明らかにすることで、職業の通りの価値の再定義、用途への介入に向けた変化の許容範囲の目安について検討した。

未公開の植民地期の統計1次資料も活用しながら、植民地期前から2017年に至るまで10時点間の職業の通りの変遷を追った。データの正確さ・信頼性の面で限界はあるものの、同業者集積という商売形態と、多様な職業の通りが地区内に複数存在するという特徴は、社会的なターニングポイントを超えてなお維持されてきたことを実証した。また、統計資料の分析からは、通り名関連の職業の衰退過程や、原材料から製造業への展開過程と思われる動きを見出したほか、観測頻度が高いほど、集積が定着しやすい可能性を指摘した。

通りレベルでの長期的な変化パターンは、①通り名の関連職業の維持、②新規職業の集積の形成・定着、③植民地期まで通り名の職業・職種の集積の維持、④直前の職業と関連しながら変化、⑤転換後に特定の同業者集積が継続（ドイモイ前／後）、⑥職種内の職業への転換の連鎖、⑦変化が継続、の7類型に分類できた。この分類から、職業の通りにおける集積変化の強度（職業内の転換 - 職種内の転換 - 職種間の転換 - 業種間の転換）と速度（集積の定着期間の長短）という軸を導き、既存の枠組みにおいて「職業の通り」とされてきた伝統的な職業以外にも、比較的变化の程度が小さい「直前の職業と関連しながら変化した通り」と、長期的な定着がみられる「ドイモイ前に転換した職業の通り」については、旧市街全体の特徴に寄与するという点で、保全型マネジメントの対象になる可能性を指摘した。また、既存の枠組みで示された「職業の通り」の判断基準として、通り名に関連する伝統的職業か否かという二元論の中間的な変化の許容範囲の目安として、強度と速度の2軸上で検討する可能性を提示した。

以上から指摘されるハノイ旧市街の職業の通りの価値は、「変化を内包しつつ独自の価値を継承する動的なシステムとして機能することで、地区全体の特徴を維持している点」にある。個々の通りでこうした場所と活動が結びついたシステムが時代を経て継承・再生産されていく状況は、職業の通りが動的なシステムとして機能していることを示しており、この職業の通りの中核にあるのが、同業者を集積させているメカニズムである。

集積と都市構造の関連として、小さな道路で細かく分けられた街区割を指摘した。街区辺は集積の範囲を規定しているように見受けられ、多様な職業の通りが徒歩数分で入れ替

わり現れる、独自の空間体験の器として機能している。また、通りの集積転換が起こる際の範囲としても、街区単位で起こっている可能性が示唆された。街区割と集積の関連は、1993年規制以降、常に保全対象となって来た道路ネットワークという有形要素の重要性を、無形要素の観点から改めて価値づけるものである。

第4章：職業の通りにおける同業者集積の変容

第4章では、3つの通りのケーススタディに既往研究の知見を加えて、職業の通りの維持・再生産の中核を担う同業者集積の転換メカニズムの仮説を構築し、そこから得られる職業の通りのマネジメントの対象、施策の方向性について検討した。

第3章で得られた類型のうち、既往研究では対象とされて来なかった、比較的变化が緩やかな直前の職業と関連しながら集積が変化してきた Hàng Đào 通り、ドイモイ前に転換した職業の集積が継続している Hàng Bưởi 通り、そして地区内の変化類型で最多となっている、ドイモイ後に転換した職業の集積が継続している Lương Văn Can 通りを取り上げた。これらについて、文献調査・インタビュー調査より、長期的な転換の状況を把握した。また、店舗アンケートと長期住民・商業者へのインタビュー調査から、各通りの商業の実態と、短期的な集積転換プロセスを明らかにした。

ケーススタディから見出したプロセスと、既往研究の知見を踏まえて構築した職業の通りにおける集積転換のメカニズムの仮説は次のとおりである。集積発生から確立には職人集落由来のもの、集積する職業の転換を経て形成されたものがある。集積転換メカニズムはブーム期（量的な同業者の増加による集積の発生）、淘汰期・ブランド化期（自由競争の中で良質な同業者の選別）、ブランド強化期（新規参入者・職業転換による流入>集積職業からの流出）、転換期（流出>流入）、の段階に分けられる。

集積の転換プロセスへの参加者として既存商業者、既存住民、新規参入者、観光客の4者とそれらの変化への関わり方を描写・指摘し、特に淘汰期・ブランド化期後における新規参入者の動きが、その後の集積の転換、集積の強化を左右することを指摘した。

また、商業者にとっての同業者集積の普遍的価値として、「競争的環境の中で、切磋琢磨した結果生き残った優良店舗の集合」というプロセスを連想させることで、その通りにおける特定の商品・職業の品質保証を獲得する点、この場所に結びついた職業への誇りが商店主の中に内面化されている状況が、職業の通りに埋め込まれた活動一場所のつながりの核であることを指摘した。ほとんどの通りで商取引上のギルドをはじめ商業組織がなくなった現在、集積は個々の商業者が見出す価値に依存しているが、一部の通りで新たに形成されつつある集積ではその意味が変質している可能性もあり、同業者集積の価値の維持により、職業の通り、ひいては旧市街のアイデンティティを維持することが重要である。

以上を踏まえ、マネジメントへ向けた示唆として、①仮説的な集積の転換メカニズムの中で、どの段階にあるのかを見極めるための、基礎となるデータベース構築とモニタリング体制の整備、②職業の通りにおける集積の質を把握するための参加型機会の確保、③淘汰期以

後の新規参入者の誘導策の準備、④既存店舗における観光需要の取り込み支援、⑤職業の通りのマネジメント方針の決定の重要性、⑥変化の強度のコントロールという目安設定の可能性、の6点を提示した。

結章

結章では、第1章～4章で得られた知見を整理し、総合考察としてリサーチクエスションへの回答を示すとともに、ハノイ旧市街の今後のマネジメント策構築に向けた方針の示唆としては、同業者集積の価値の多角的な把握、集積状況のモニタリングと変化段階の見極め、集積の維持に向けた直接・間接的支援、商業活動への介入に向けた変化の許容の目安等を示した。最後に、都市遺産マネジメントへの知見と本研究の貢献および今後の課題を整理した。

以上